

業績部門：大学・自治体・住民との地域連携による「海を活かしたまちづくり」をテーマとする地域活性化への貢献

日本大学理工学部海洋建築工学科 近藤 健雄
日本大学理工学部海洋建築工学科 佐藤 信治
日本大学理工学部海洋建築工学科 山本 和清

本学科では、日本大学が掲げている「自主創造」を合言葉に、学生自身の主体性を重んじた教育・研究に取り組んでおり、学生の問題発見能力や発見した問題点・課題点の解決能力を養う、OJTを重視した少人数制の実践的教育を導入している。今回の受賞テーマにもなっている「大学・自治体・住民との地域連携による「海を活かしたまちづくり」の授業も、自主創造を背景にした実践的教育の一環として実施された設計教育である。

一般的に従来の設計製図の授業形態は、教室における課題の演習作業を中心にしたものであった。結果として、図面やシステム図などを駆使した成果物を教員のみが評価するといった授業形態であり、換言するならば教室内だけの閉鎖的な授業であると言える。

その様な授業形態に対して、今回の受賞対象となった本学科4年生科目「総合演習Ⅱ（プロジェクト企画演習）」の授業では、1グループを学生3～5名とし全体で5グループ程度の構成で授業を行っており、協働作業が基本となる実社会に近い形態での授業としている。そして、グループごとに課題対象地として設定された東京湾沿岸部において、港湾やウォーターフロントが有する多様な資質や資源性に注目し、それらの特徴を最大限に活用した「海を活かしたまちづくり」を提案するものであり、課題対象地となった当該自治体の担当者及び地域住民との交流（アンケートやヒアリング）を通じて、地域が直面している問題点・課題点を明らかにし、併せて住民や自治体が求めている地域活性化の方向性を提案するというOJT方式の授業を進めてきた。また、その成果発表にあたっては、当該自治体の協力を得てコミュニティセンターや市民会館などの公共施設を利用し、自治体職員・関係諸団体・地域住民などを聴衆とした公開式のプレゼンテーションを実施している。その内容は、プレゼンテーション用PCソフトを用いた発表の後、フロアーに展示した模型と図面を前に審査委員や聴衆が直接学生と質疑応答を行い、大学の有識者・専門家（建築家・地元漁師）・関係NPO・当該自治体幹部（通常は市長または副市長）・当該課題対象地を所管する港湾事務所々長など5名程度で構成する審査委員会と、発表会に参加した聴衆による投票結果で評価する方法を用いている。そのため、学生自身も社会的に客観性を持った評価として受容することができ、近年高等教育レベルでも重要視されて

いる「ふりかえり」という学習の概念からも、従来の設計教育に一石を投じる成果であったものと感じている。また、本授業が「海を活かしたまちづくり」という統一テーマで11年間継続して実施できたことも、スパイラルアップを目指すFDの視点において重要な要素であったと考えられる。



近藤 健雄

1970年日本大学理工学部建築学科卒、1972年米国ハワイ州立大学大学院海洋工学専攻修了、1973年日本大学理工学部建築学科助手、1978年日本大学理工学部海洋建築工学科専任講師、1981年同助教授、1995年同教授、2014年より同特任教授、工学博士



佐藤 信治

1986年日本大学理工学部海洋建築工学科卒、1988年日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻博士課程前期修了、1995年日本大学理工学部海洋建築工学科助手、2008年より同専任講師、博士（工学）



山本 和清

1989年日本大学理工学部海洋建築工学科卒、1991年日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻博士課程前期修了、1991年日本大学理工学部交通土木工学科（現：交通システム工学科）副手、1992年同海洋建築工学科に移籍、2006年より同専任講師、博士（工学）